最近の舞台照明について

The Latest Information of Stage Lighting

1933年生。1954年東京
学芸大学1部2類国文
学科中退。現在、(財)日
本照明家協会会長。東京
芸術大学客員教授。
1997年紫綬褒章。共著
「新建築学大系33劇場
の設計」ほか。

吉井 澄雄
Sumio Yoshii

◀キーワード：仮設劇場，巨大演出空間，新国立劇場，音についての配慮

1. はじめに

照明学会誌昭和62年（1987年）第71巻第5号は、「最近の舞台照明」特集号であった。「舞台照明と演出」と題した所載の拙稿から、ほぼ10年が経過している。その間に、舞台照明と、舞台照明がかかわる世界で、何が変わったか？

表題の「最近の舞台照明について」記述しようとするとき、見落とすことのできない焦点が3つある。

第1は、仮設劇場。

昭和58年（1983年）に、劇団四季はアンドリュー・ロイド・ウェバー音楽、浅利慶太演出のミュージカル「キャッツ」上演のために、初めて専用の仮設劇場を新宿西口の都有地に作った。

以後、劇団四季は大阪、名古屋、福岡、札幌の各都市に次々と仮設劇場を作り続け、平成10年（1998年）現在、東京では、ミュージカル「キャッツ」と「美女と野獣」を、それぞれ品川と赤坂の専用仮設劇場で上演している。

従来、ミュージカルを上演しようとするプロダクションは、すでにある、いくつかの劇場の中から、日程、客席数、舞台の構造、寸法など、さまざまな技術的、経済的条件に適合する劇場を選択して公演を行っていた。

この事情はニューヨークのブロードウェイでも、ロンドンのウェストエンドでも、東京でもまったく同じである。ミュージカルの上演よりも、はるか先に、まず劇場という建物たちが存在している、というのが常識であった。

ロングランという上演システムにあって、ミュージカルの公演を計画すると同時に、そのミュージカルのための仮設劇場を設計し、建設するという劇団四季の手法は、ショービジネスの世界でも、破天荒な、まさにコペルニクス的発想の転換である。

具体的な作品を想定することなしに、劇場を設計してきた建築家、諸設備の設計者たちは、否応なしに従来とちがうアプローチをせざるをえなくなるだろう。舞台照明の世界でも、この仮設劇場から、新しい影響や発想が得られるのではないだろうか。

沢田祐二氏は劇団四季の技術監督として、初めから仮設劇場の建設にかかわってこられているので、「ミュージカル照明」の稿で、その一端が明らかにされるだろうと期待している。

第2は、巨大演出空間。

既設の巨大演出空間、たとえば日本武道館、横浜アリーナ、大阪城ホールなどに続いて、この10年の間に東京ドームを始めとして、各地にドームが建設されている。野球のみならず巨大な演出空間として、多くの観客の足を向かせるようになってきている。

膨大なCDの売り上げを背景にもつ、ポップスやロックミュージックのアーティストたちの上演は、こうした巨大な演出空間を使って、ツアー公演というかたちで行われている。

オペラや演劇の上演で、必ずしも使用されるとは限らないムービング・ライトやカラー・スクローラなどの、コンピュータ制御によるリモート・コントロールの照明器材は、この分野では、ほとんど必須と言える。

オペラ・バレエ、ミュージカル、演劇、舞踊といった、主としてプロセニウム形式の劇場で上演される舞台芸術の照明とは、発想、表現、技法などのソフト面から、使用する調光操作卓、スポットライトを含む照明器材などのハード面にいたるまで、全くと言ってよいくらい異なるのが、巨大演出空間における舞台照明である。

巨大な空間であるがゆえに、リモート・コントロールと、遠距離からの投光と大光量を想定したスポットライトは、最重要な課題となる。

劇団四季による仮設劇場と同じように、ここで重要なのは、建物ではなくプロダクション（本稿では、広義の舞台芸術「パフォーミングアーツ」を創作する人たちと、企画・製作・上演にかかわる人たち、それぞれの個人と、その人たちによって構成される組織体の双方を含むと定義している）である。

近来、舞台照明のジャンルの中では、もっとも国際的な交流や情報の流入が活発なこの分野については、加藤憲治氏の「ツアー照明」の稿で紹介されることだろう。

第3は、新国立劇場。

仮設劇場と巨大演出空間は、舞台照明の世界に、いわば新しい波をもたらした、もしくは、もたらそうとしていってよいとすると、新国立劇場は在来型の劇場の集大成と言ってもよいだろうか。

21世紀を目前にして、オペラ劇場のこけら落としをするのは、先進国の中では日本だけであろうが、とにもかくにもわが国で初めてのオペラ劇場である。舞台照明設備のみならず、建築や舞台設備全般にわたって、新たに劇

場を計画される際には、採用を検討して頂きたい手法や結果がいくつかある。

そのすべてにわたって詳述することはできないが、新国立劇場で特記すべき事項については、簡略ではあっても網羅するよう心掛けたい。厳密には舞台照明の範囲を逸脱する部分もあるが、劇場の照明という解釈でおゆるしいただきたい。

新国立劇場について語ることで、わが国の「最近の舞台照明」についての報告の終章とさせていただくこととする。

2. 新国立劇場

2.1 音の問題

近來、劇場・ホールの音響性能は著しく向上し、暗騒音のレベルも大きく低下した。その結果、以前にはあまり気にならなかった騒音が、観客の耳に入るようになってきた。

しかし、劇場・ホールの音響的性能の測定は、舞台照明や舞台機構が稼働していない状態で行われている。したがって空調設備や客席照明設備については、自ら発する騒音についての配慮や仕様が存在しているが、舞台照明と舞台機構については、音にかかわるスペックは全くと言ってよいくらい持っていなかった。

コンサート・ホールはともかく、オペラ劇場において、舞台設備がランニングしていない状態での音響的性能を規定しても無意味であろうことから、客席最前列中央部に座って、あらゆる舞台設備が稼働状態での騒音を40db以下と規定した。

舞台照明はさらに、あらゆる照明器具から発生する騒音を、例外なく30db以下とする仕様を持った。この仕様のために、優れた光学性能を持つスポットライトも、騒音のために採用できない場合があった。

スポットライトの空冷ファン、整流器、温度変化によるボディの収縮、パワーサプライ、放電灯の高調波、マシン類のモータなどなど、電球のシンギングを除いて、追放すべき騒音源は多岐にわたったが、各メーカーの協力、施工管理担当者の努力により、わが国の舞台照明器具が、結果としてきわめて静かになったことを感謝したい。

2.2 厳密な仕様書

前記の騒音レベルも含めて、光学的性能、機械的性能、光の洩れ、使い勝手に属する部分など、かなり細部にわたって仕様を明確にした。従来の特記仕様書とは一線を画している。

2.3 光の点滅による開演合図

わが国の劇場・ホールでは、開演5分前と開演の“しらせ”は、ベル、ブザー、ゴング、ドラなど、例外なく、音によっていた。

オペラ劇場では、ロビーと客席内の照明灯を100%と

50%のレベルで点滅することによって、5分前と開演の“しらせ”を行っている。

2.4 レポートリイ・システムへの配慮

舞台照明設備のあり方は、劇場の上演システムに大きな影響を受ける。

わが国では、劇団四季の仮設劇場以前にロングラン・システムは存在せず、レポートリイ・システム（年間に、いつでも上演できる演目を数十本常備し、演目を日変わりで上演する）は現在にいたるまで、採用している劇場はない。そのために、わが国の照明器具のハンガ（つり下げ固定金具）は、着脱、移動が容易な反面、数年間は動かないよう固定するのは困難である。ロングランを予想していない設計思想といえる。また、照明器具を一度とりはずしたら、元の位置、元の方向、角度（水平および垂直）に復元することは難しい。

レポートリイ・システムにあつては、照明器具の確実な固定とともに、照射方向、角度、フォーカスの迅速な復元が必要である。

そのために、新しいタイプのハンガの採用、照明器具のあらゆる可動部分に目盛りの表示が行われている。

2.5 DMX512信号の採用

舞台照明設備を駆動する信号として、USITT（米国劇場技術協会）準拠のDMX512を全面的に採用した。調光器、ディミング・シャッタ、カラー・スクローラ、エフェクト・マシンなど、すべてが同一の信号で動くのは、きわめて有用である。将来は16ビット準拠の世界標準を実用化しなければならないだろうが、現在のところは、DMX512が最良の選択と言えるだろう。

ほかに音楽のMIDI信号、映像のSMPTE信号でも、調光操作卓が動くよう配慮されている。

2.6 デザイナ卓

舞台稽古の際、客席で照明づくりができるよう、可搬型の調光操作卓を装備した。デザイナとオペレータが、ヘッドフォンを介することなく、直接に会話ができるのは、コミュニケーションの上で、非常に好ましい。

2.7 譜面灯とそのプラグ、ポケット

オーケストラ・ピットの譜面台に取り付ける譜面灯は、万一の球切れを考えて、必ず2つの電球を持つべきであるにもかかわらず、採用されたのは新国立劇場をもってこう矢とする。

また、鉛筆状のプラグと、それを受ける小さな円形のポケットによって、タコ足配線の巣だったオーケストラ・ピットの床面がきわめてすっきりした。譜面灯専用のポケットが100か所以上、床面に穴を開けているが、穴が小さいために、ほとんどわからない。

2.8 オペラ・フォリオ

布製の Horizont 幕に代えて、プラスチック製のリヤ・スクリーンを常設した。